

立教大学共生社会研究センター公開セミナー記録

「運動当事者とともにベ平連運動をふりかえる

——関谷滋さんに聞く」(2022年3月5日開催)

立教大学共生社会研究センター

## 目次

プログラム.....	2
スピーカーのプロフィール.....	2
関谷滋さんのお話 .....	3
◎生い立ち～ベ平連との出会い .....	3
◎ベ平連の事務所で .....	7
◎脱走兵が来た.....	10
◎JATEC の活動.....	13
◎脱走兵を支える「人民の海」.....	17
◎反戦喫茶「ほびっと」(岩国)、JATEC 第2期、ベトナム戦争終結 .....	20
◎ベ平連以降.....	22
質疑応答 .....	24

## プログラム

日時:2022年3月5日(土) 14:00~16:00

方法:Zoomを用いてオンライン開催

主催:立教大学共生社会研究センター

共催:地域ベ平連研究会

14:00 開会・趣旨説明(市橋秀夫:立教大学共生社会研究センター副センター長)

14:05~15:25 関谷滋さんのお話

聞き手:大野光明さん

15:25 ディスカッション

16:00 終了

## スピーカーのプロフィール

関谷滋さん(元ジャテック(JATEC =反戦脱走米兵援助日本技術委員会)・ベ平連(「ベトナムに平和を！」市民連合)活動家)

予備校生だった1967年夏に東京ベ平連の事務所に出入りし始め、1968年4月から京都ベ平連。講演活動として、2014年9月に歴史問題研究所(韓国・ソウル)、2014年11月に立命館大学国際平和ミュージアム、2015年11月に京都大学学園祭、2016年12月に名古屋市立大・教養オムニバス科目など。主な編著活動として『となりに脱走兵がいた時代 ジャテック、ある市民運動の記録(思想の科学社、1998年、共編)、「ベ平連運動の時代から現在へ」『立命館平和研究』16号(2015年、共同執筆)、『鶴見俊輔さんの仕事④ 雑誌「朝鮮人」と、その周辺』(編集グループ SURE、2017年、共著)など。

大野光明さん(滋賀県立大学准教授)

1979年生まれ。滋賀県立大学教員。専門は歴史社会学、社会運動史研究、基地問題研究。日本・沖縄・アメリカのベトナム反戦運動のつながりについて国内外で調査を行なっている。地域ベ平連研究会の主宰の一人。主な著書・論文に『沖縄闘争の時代 1960/70』(人文書院、2014年)、『メディアがひらく運動史(社会運動史研究3)』(新曜社、2021年、共編著)、「太平洋を越えるベトナム反戦運動の軍隊『解体』の経験史——パシフィック・カウンセリング・サービスによる沖縄での運動を事例に」『立命館平和研究』20号(2019年)など。

## 関谷滋さんのお話

市橋： それでは簡単に今日の趣旨をご説明いたします。このセミナーは、立教大学共生社会研究センターの認定研究プロジェクト「ベ平連資料の検証と活用」の一環という位置づけになります。また、今日お話していただく関谷滋さんと大野光明さんは、「地域ベ平連研究会」という研究会のメンバーでもあります。この研究会は日本各地にあった地域ベ平連の活動について、現地に行ったり聞き書きをしたり、それから資料を収集したり研究会を開いたり、といった形で活動しています。その活動成果の報告という意味合いもあります。

ではちょっとご紹介しますが、今日お話しいただく関谷さんは、皆さんもよくご存知かと思うのですが、10代 のとき、予備校生だった時代から東京のベ平連の事務所に出入りされて、とくにJATEC(反戦脱走米兵援助日本技術委員会)の活動では非常に重要な、中心的な役割を担い、若手の代表として活動されました。そのことは、関谷さんご自身がまとめられた『となりに脱走兵がいた時代』<sup>1</sup>という本として、成果になっています。また、関谷さんは当事者でもありませんが、研究会にも参加してくださっています。やはり同時代のことを知らない者にはわからない観点や、文脈の取り違いなどもあることから、私たちもいろいろと勉強させていただいているところが多々あるということをお伝えしたいと思います。

また、今日進行を担当してくださる大野さんは、非常に若い研究者の方で、現在は滋賀県立大学の教員です。歴史社会学、社会運動史研究、基地問題研究を専門とし、とくに沖縄を中心的なフィールド、研究対象とされています。また「越境」というキーワードは大野さんの研究に本当に欠かせないものだと思うんですけれども、日本、沖縄それから太平洋を越えてアメリカとの相互交流が当時から、じつはいろいろな形であったということ、アメリカでもインタビューを重ね、文書館で資料調査されることで明らかにされてきています。

それから、ご質問やご意見など、あるいは何か共有したい情報などありましたら、チャットをご活用いただければと思います。

それでは、関谷さん、大野さん、よろしいでしょうか？

### ◎生い立ち～ベ平連との出会い

関谷： 関谷滋です。地域ベ平連研究会のメンバーと紹介していただきましたけれども、私は研究者ではありません。当事者として興味があったので時々顔を出させていただいています。今日のはたぶん半分以上の方が、私がお会いしたことのない方のようなようです。ちょっとびっくりしてるんです。当時私が経験したことで皆さんのお役に立つようなことがあればお話したいということで、今日このお話をお受けいたしました。どうぞよろしく願いいたします。

---

<sup>1</sup> 関谷滋・坂元良江編『となりに脱走兵がいた時代 ジャテック、ある市民運動の記録』(思想の科学社、1998年5月)

大野：先ほどご紹介頂きました大野光明と申します。研究テーマなどは先ほど市橋さんから話していただいた通りです。日頃から調査の一環でいろいろな形でインタビューをさせていただくことは多いのですけれども、こういう形でいろいろな方が観て・聴いている中でお話を伺うのは初めてなもので、少し緊張しています。皆さんと一緒に関谷さんを囲んでお話を伺う、その聞き役の一人として今日はお役に立てたらと思っています。よろしくお願いします。

今日の資料は、たぶん共有フォルダを通してお手元にお持ちと思います。とくに今日関谷さんにお話を伺う上で大切だな、と私が思っているのは、詳細に作られた年表ですね。こういうものをまとめてらっしゃるのが、ほんとうにすごく驚きです。この年表に沿ってお話を伺っていく、という形にさせていただきたいと思います。

では、さっそくなんですけれども、まず関谷さんの生い立ちの部分ですね。1948年生まれということですが、どんなふうに幼少期をすごされたのでしょうか。その後のご自身の人生を振り返った時、ご両親からの影響や育った環境からの影響など、まずは生い立ちの辺りからお話を伺えますか？

関谷：いわゆる団塊の世代真ただ中、1948年生まれ。私は次男坊です。新潟の次男坊っていうのはだいたい高校卒業したら新潟から出るもんだという感じで育った人が多い。米どころで農家がたくさんあって、田んぼは長男だけが相続するのが当たり前で、田んぼを分割して相続するのは田を分ける「たわけ者」っていうられるような土地柄ですね。だからなんとなく、高校を出たら新潟は離れるんだろうなと思いつつ育った。

特別、社会的にいろいろな関心が強かったわけではなく、ごく平凡に過ごしてきたつもりです。67年の3月に卒業して、4月から東京で予備校に通うようになりました。4、5、6月と相当まじめに予備校に通っていて、ちょっとなんか肩が凝ってきたなということで、新聞を見たら6月の下旬に鶴見良行さんなどの講演会があるっていうのが目に入りました。「ちょっと気晴らしに行ってみようかな」と参加したんですね。鶴見良行さんの他にも、陸井三郎さん、著名な方でしたけれども、3人ほどのお話でした。そのときベ平連が中心的なテーマにあげていたベトナムに医薬品を送る「平和の船」のキャンペーンを中心に良行さんがお話になったと思います。

それが心に残ったんだろうと思うんですが、すぐに動いたということではなくて、予備校の1学期が終わって、高校3年生も交えた夏期講習が1週間か10日くらいあって、それも終わって新潟に帰ろうという時に良行さんの話を思い出した。「ああ、平和の船のキャンペーンやっているんだったら、帰りのチケットを買ったので、後は有り金全部寄付しても大丈夫だ」っていうことで、探しながら、当時御茶ノ水にあった事務所を訪ねたんですね。そして私の勝手な思い込みなんですけれども、良行さんの講演会は朝日新聞の本社にある講演会場、朝日講堂というとても立派な会場でお話をされて、入り口には私と同年くらいの若者が5・6人くらいでチラシを配っていたり、すごく立派な人たちがやっている運動なんだろうな—と思いつつ、だからさぞかし事務所も立派な門構えだろうな—と想像して行ったところ、四階建てくらいの古びた雑

居ビルの一室でした。で、ドア開けて入ったら男の人が一人、留守番というか電話番をしていて、「カンパ持ってきたんですけど」といったら、「ああどうもありがとう」「学生さんですか」みたいな話をしているうちに、彼は同じ予備校に通ってるということがわかりました。意外だったんですね。自分が勝手に想像していたのと現実のベ平連の事務所の姿が、ギャップがものすごく強く印象に残ったのと、その会話。それからしばらく話してるうちに何人かやってきたんですけども、ほとんどが同じ予備校の予備校生だった。ちょっとびっくりしながらその日は新潟に帰って、お盆を過ぎて戻ってきた。なんとなく楽しい雰囲気があったのもう一度顔出しをしてみようと。そこからベ平連の事務所に入出入りを始めたってことです。

なんとなく楽しくて毎日のように予備校が終わってから顔出すようになって、それで事務の手伝いなんかもするようになった。吉川勇一さんも毎日のように事務所に顔を出しておられて、まだそれほど忙しい時期ではベ平連もなかったもので、いろいろなお話もしていただいた。けどまあ10月の後半になってそろそろ予備校に、本格的に受験勉強再開しないとまずいなと思いつながら行ってた頃にイントレピッドの脱走兵からの電話がベ平連にかかってきた。それでバイカル号で出港し、それから記者会見が11月13日にあつて、ものすごい反響がありました。それまでは東京のベ平連事務所にくる手紙は一日に10通、20通程度だったんですけども、13日の記者会見のあとは、手紙が段ボール箱に詰められて配達されてきた。そろそろまともに予備校に戻ってきちんと受験勉強してと思っていたところに、とてつもない量の手紙が舞い込んできて事務処理がとてつもない間に合わない。この状況でいなくなるわけにいかないな、みたいな感じでずるずると事務所にいついたというのが正直なところですね。

大野：脱走兵支援の運動に巻き込まれていく過程や、それ以降の話はこのあとまた詳しく伺おうと思います。その前に、すこし話が戻ってしまいますけれど、関谷さんが育った地域は「農村」と言ってよいのでしょうか？

関谷：父親が教員をやっていたもので、転勤は何度かしたんです。ですから農村部でも暮らしたけれども、いちばん長かったのは三条市で、中小企業の街ですね。金物の町で、隣が洋食器の燕市。中小というより零細企業・家内工業といった方が近いかもしれません。そういった工業地域的な面もありましたが、郊外に出たら一面田んぼという環境です。一般的には保守的な土地柄ということかと思います。

大野：ご両親などから何か影響を受けたことはありますか。例えばインタビューで他の方がよく語られるのは、「家にこんな本があった」とか、「親は運動やっていた」とか。そうした影響を受ける方も多いと思うんですが、関谷さんにとっては何かありましたか？

関谷：特別何か印象に残ることはなくて、自由にさせてもらってたっていいのかなと思います。まあ次男坊ということもあって、そんなにあれこれ口やかましく言われることもなく、わりと好きなこと

をやらせてもらったと思います。

大野： そうしますと、67年に東京に、予備校入学のために来られたっていうことは一年表にもありますけれども一、ちょうど高校時代に65年の北爆開始とベ平連の発足という時期が重なっている、という理解でよろしいでしょうか？

関谷： そうですね。その当時のかなり大きな話題でしたので、高校でもクラス討論でベトナム戦争を取り上げたりはしたんですけど、それ以上とくに何か始める、深めるということはなく。クラス討論でも「アメリカが共産主義と闘っているんだから絶対に応援しないとダメだ」と言う神主の息子がいたり…という状況で、とくに何か動きが出てきたということではなかったですね。

大野： 何か高校の中で新聞を作ったとか、ビラを配ったとか、デモに参加したことがあるとか。そういうことはなかったんですね？

関谷： 一切なしです。新聞を読む程度の興味しかなかったということだと思います。

大野： なるほど。新聞や当時テレビなどでも、ベトナム戦争で随分大きく報道され、お茶の間まで戦場の様子が届けられた初めての戦争だ、という言葉方もします。高校時代の関谷さんのベトナム戦争のイメージとか、受け止め方はどんなものだったのですか？

関谷： 初めて目の当たりにする戦争ということは、確かにその通りですね。それと第二次大戦の話題がまだまだいろいろ出てきていた時代。例えば中国などでこんなひどいことがあった、というようなことが写真入りで、いまのようにぼかしが入らずに、切り落とされた生首を持つてる写真がふつうに週刊誌に載るような時代でした。高校時代ではないんですが、ベトナム戦争でいちばん衝撃的だった写真、あの警察の長官か何かが、ベトナムの捕虜を街頭で、その場で射殺した写真がありました<sup>2</sup>、ああいうのが全然ぼかしを入れることなく新聞や週刊誌にそのまま載っているのが普通の時代でしたから。それは相当衝撃的な出来事でした。

大野： お父様には戦争の経験はもちろんおありだった？ 従軍の経験が？

---

<sup>2</sup> (関谷さんによる注)ベトナム戦争中の1968年2月1日に、警察官とその家族を殺害した疑いをかけられたグエン・ヴァン・レム(グエン・タン・ダトとの説もある)が、逮捕されたサイゴン(現在はホーチミン市)の路上で、裁判はおろか取調さえうけることなく、南ベトナム(当時)の警視総監グエン・ゴク・ロアンに射殺された瞬間をとらえた写真「サイゴンでの処刑」はピューリッツァー賞に選ばれた。この写真は激しい反戦運動のきっかけともなった。撮影者の報道写真家エディ・アダムスは授賞を辞退した。もちろんこの他にも衝撃的な映像が数多く報道された。

関谷： いや、教師をしていましたので、体験入隊というのかな？ 3か月か半年かそのくらい、召集されて地元の部隊に入って訓練を受けて、それで終わったと聴きました<sup>3</sup>。ですから戦場経験はありません。親戚で亡くなった人は2人ほどいましたが、一族としてはそれほど多くの被害を受けたという方ではなかったです。

大野： そういった第二次大戦の経験や記憶に身近なところで触れるということは、それほど…

関谷： それほど多くはなかったですね。おばさんのご主人が戦死しているので、遊びにいくと、軍服の写真が飾られているとかそういうことはありましたし、先ほどいったような生々しい写真を載せた週刊誌が、たとえば散髪屋に行ったりすると置いてあるわけですね。だからわざわざ買って読むことはないですけども、子どもでも見る機会はそんなに制限されることなくありました。

大野： そういう中で東京に行かれて、鶴見良行さんの講演を聞いてみようと思ったのは、何かあったのですかね、響くものが。

関谷： そうですね、やっぱりベトナム戦争は、気になっているできごとではありましたね。自分が何かできるとかそういうこととは全く無関係に、大きくなってきている話題であるし、いちど話を聞いてみよう、という感じでした。

## ◎ベ平連の事務所で

大野： 67年の夏からベ平連事務所に通われたということなんですが、先ほど「すごい楽しい雰囲気を感じた」とおっしゃいました。どういう雰囲気を事務所やそこにいた人たちから感じたんでしょう？

関谷： 大半を占めていたのは、同じ予備校に通っている人たちで、ほとんどが東京で自宅に住ん

---

<sup>3</sup> (関谷さんによる注)このセミナーの後で調べたところ、国公立の師範学校(現在では大学の教育学部に相当)の卒業証書所持者は「短期現役兵」として4月から8月まで5カ月間の入隊・訓練で兵役を済ませた(1939(昭和14)年3月に制度廃止)。[『改訂版 帝国陸海軍事典』大濱徹也・小沢郁郎著、1995.8、同成社。25, 30～32頁より]

1904年生れの私の父は、この制度により高田市(現在の上越市)の歩兵連隊に召集されたものと思われる。

次代の強兵の養成に資するための制度とされ、「4月からの5カ月間」は二学期に教壇に復帰するための期間設定だが、年代により入営時期・期間には変動がある。

師範学校卒業証書所持者は小学校教員の半数程度で、残る半数は正規の教員免許のない代用教員と代用教員出身で教員検定により教員免許を取得した者であったとの研究がある[山本朗登「戦前兵庫県における乙種講習科に関する研究」神戸大学発達科学部研究紀要第14巻第2号、2006]。



でいました。東京の人は人づきあいがうまいってうか、話題も豊富だし、こちらがあまりしゃべらなくても話の輪の中にちゃんと入れてくれたり、そういうところがあって、居心地がいいし、いろいろなことも聞けて楽しかったということもありますね。街頭でのカンパ活動とかキャンペーンなんかで、「お前もしゃべってみろー」ってマイク渡されたこともありました。見よう見まねで少しずつやっていくようになったということですね。

大野：ベ平連は同じ予備校とか学生の世代だけじゃなくて、それよりも上の世代の人たちも事務所には出入りしていたと思うのですが。事務所での様子とか、どんな人がどんな仕事をしていたのか。また、関谷さん自身がどんな仕事をされていたのか、聞かせてもらえますか？

関谷：昼過ぎくらいに事務所が開く、だいたい事務局長の吉川さんが鍵を開けてってということがほとんどでした。

大野：少し写真を共有してもらいます(画面共有)。左が関谷さんですね。右の二つは事務所の様子だと思うんですけど。

関谷：右下は当時の、お茶の水駅近くの事務所の中ですね。真ん中の写真は、これは事務所ではないですね。みんな座ってます。どこかの家、たぶん脱走兵がきて、打ち合わせか何かしているところではないかなと思います。真ん中が小田実さんで左端が吉川勇一さん、寝転んでるのが、奥の方は良行さんかな、ちょっと写真がはっきりしないのであれですけど。事務所ではないです。畳のところかなと。

大野：すみません、写真を出して話を区切ってしまったのですが、事務所の中の雰囲気ですとか、年配の方々との関係性とかについては…

関谷：年配の方というと、毎週火曜日の夜に、「内閣」という名前を付けてましたが、大人たちが集まって会議をする時間があって、その時以外は、吉川さんの他はあまり大人の人たちは顔を出さなかったですね。夕方6時ぐらいから三々五々、10人くらいかな、集まって、いろいろな話を、雑談をしているんですね。「この人たちはなんと話題が豊富で、打てば響くようにいろいろな反応がすぐに返ってくる。こんなすごい人たちが世の中にいるんだ」と思うくらいに話題が豊富で話に深みがある。そのうちに吉川さんが「おーい、そろそろ始めよう」と会議を始めていくつという感じなんです。鶴見俊輔さんも、小田実さんも、そういう中で顔だけは「ああ、この人が」と。ほとんど話をする機会って、まだその頃はなかったんです。最初のころは、しばらくしたら私はもう帰っていたんです。

大野：この当時の「内閣」と言われていた毎週火曜日の会議というのは、関谷さんのような若い人

たちもふつうに参加できたんですか？

関谷：「別段いてもかまわない」とは言われてきましたが、東京が自宅の予備校生が多くて、その人たちは夕食は家でとらないといけなかったので、夕方になると帰って行きました。私はまあ別に、兄と二人のアパート暮らしで、何時に帰ろうとかまわないので、やりかけの仕事があったりすると少し遅くまでいることがありました。吉川さんの手伝いで事務なんかをやるようになってきましたので、「平和の船」のキャンペーンがどのくらい進んでるかとか、吉川さんから「ちょっと時間があつたら残って報告してよ」みたいなことを言われるようになって、少しずつ「内閣」が始まって残って、話を聞くようになりました。それと、たまたまなんですけども吉川さんの帰り道の途中で私のアパートがあったもんですから、遅くなって終電がなくなっても、吉川さんに「送ってやるから」と言われて、かなり遅くまで残るようにだんだんなっていく、っていう感じです。

大野：「内閣」に参加してる人って、例えばどんな人がおられたんですか？

関谷：えーと、私がいた頃は、小田さん、鶴見俊輔さん、鶴見良行さん、武藤一羊さん、まあ吉川さんは当然。それから栗原幸夫さん、福富節男さん、古山洋三さん、寺井美奈子さんは会計責任者でした。あ、それから小中陽太郎さん。そのあたりの方はだいたい皆勤に近く来ていたかなと思います。深作光貞さん、阿奈井文彦さん、若者では室謙二、吉岡忍なども時々。

大野：そういう意味ではわりと有名な文化人、それも男性が多かったということですね。

関谷：そうですね。女性は、寺井さんは先ほど申し上げました。あとは藤枝濤子さんが時々。もう少し経つと浦和のベ平連ですけど小沢遼子さん。そういった方が入ってこられてたかな。

大野：先ほど、『『平和の船』の経過報告をしてよ』なんてことを吉川さんから言われた、ということですけど、関谷さんがベ平連に関わり始めて、事務所ではどういった仕事や役割を振られたんですか？

関谷：みんなそうなんですけど、届いた手紙を読んで、何人かで回し読みをしたりして、返事があるものは返事を書く。勝手に返事書いたりしていいのかな？と思うようなときは吉川さんに見てもらおう。それと送られてきたカンパを記帳して、「ベ平連ニュース」の購読申込みであれば購読者のカードを作って、それから、今の人にはよくわからないかもしれませんが、名刺サイズの宛名専用のガリ版つてのがあったんです。そこに宛て名をガリで切って、ニュースの発送に備えておくっていうような一連の作業がありました。それと領収書のはがきを送る。そういう作業を吉川さんから、かなりこと細かく指示を受けながら、「それだめ、それ違う」とか言われながらみんなやってました。いちばん忙しいのはニュースの発送のときで、封筒にちっちゃな名刺サ

イズのガリ版で1枚1枚宛名を印刷する。それでニュースを折って中に入れて、封をテープで止めて、千通ほどのものを、大きなかごに入れて何人かで近くの郵便局まで運んで、そうか、別納スタンプは郵便局から借りてたものがあるので、事務所でぼんぼんぼんぼん別納のスタンプを押して、運んで発送するってのが、毎月1回必ず、大騒ぎしながらやってた作業でした。

大野： それ、千通ほど、と先ほどおっしゃいましたね。

関谷： そうですね、67年の終わりごろで千通くらいという「ベ平連ニュース」の記事がありました。

### ◎脱走兵が来た

大野： 話は少し戻りますけれど、脱走兵が来た。それによって事務所の中が、全く雰囲気が変わっていったという話でした。ちょうど脱走兵が出たという電話を吉川さんが事務所で受けられた時に、関谷さんはその現場におられたわけですが、その当時の様子やその後、どんなふうに関谷さんが脱走兵支援が始まっていくのか。その辺りのことを伺えますか？

関谷： 土曜日の午後、大体みんな集まっていた、午後2時ぐらいだったと思うんですけど、ふつうにまあ事務作業をみんなでやってた時に、吉川さんが電話を取って、「えっ！脱走兵！」って最初の一声、吉川さんがしゃべったんです。それでみんな、固唾を飲むというか、本当に誰一人身動きひとつせず吉川さんの口元を見ているみたい。『となりに脱走兵がいた時代』にも書きましたが、吉川さんが電話を何本かかけて、たぶん小田さんとかと連絡を取ってたと思うんですけど、そこはあまりはっきり覚えていません。それから鶴見俊輔さんへ電報を打ったんです。というのは、鶴見俊輔さんはそのころまだ固定電話を置いてなかったんですね、京都の家に。今の人は信じられないかもしれないけれども、その頃は電話を申し込んでもすぐにはつけてもらえなかった。しばらく待ってないと順番が回ってこない。だから鶴見俊輔さんも電話の申し込みはしてるんだけど、まだ設置してもらってないときだったので、電報しか緊急の連絡の方法がなかった。それで、「ダツソウヘイアラワル シキユレンラクヲコウ ベヘイレン」ってご自分で書いたメモだけ見ながら吉川さんが「煙草の夕に濁点」「鶴亀のツ」「そろばんのソ」とか、聞き間違えのないようにと制定されていた和文通話表というものがあるそうで、それにしがってスラスラとしゃべり始めたんです。「この人は何でも知っているんだなあ」と、ちょっとびっくりしました。電話で電報をかけたんですけども、当時はNTTの前身で電電公社って言ってました。たぶんその係の人から「脱走兵？」って聞き返しがあったんだと思うんです。吉川さんが落ち着いて「そうです。脱走兵です」ってまじめに答えた。一人が「そりゃー、向こうもびっくりするよなー」って言って、それでみんなワーッと笑って、ちょっと緊張が解けたっていうような、それが強く印象に、僕の中では残ってます。

それから2週間ほど、ベ平連の事務所の中では誰も脱走兵の「だ」の字も話さなかった。吉

川さんも何も言わなかったし、こちらもなんか聞きたいけれども聞いたらあかんのかな、と思って。誰一人一言も触れないままずっと時間が過ぎて行った。11月に入ったあたりで、吉岡忍と僕と二人、吉川さんに呼び出されて、「今のところ無事だ。ちょっと手が足りないんで手伝ってくれるか」みたいな話をされたことがあります。その時は、結局出番はなかったんですけども。それでバイカル号で外に出て、公海上に出た頃を見計らって吉川さんが記者会見の案内をし始めたというようなことだったと思います。そのときもそばにいたんです。最初はそんなに時間がかからずに記者会見の通知を終えるつもりで、吉川さん、電話を始めたんですけども、いろいろ質問が返されたりするもんですから、思い通りにはなかなか通知が終わらない。電話は2回線しかなくて、しかもそのうち1回線は基本料金の安い着信専用でしたから、吉川さん「これじゃ間に合わんなあ、俺ちょっと外でかけてくるわ」といって、「あと残り、これ、電話しといて、聞いてたからわかるだろう」と私一人置いとかれて事務所から記者会見の案内を続けたという記憶があります。その晩、吉川さんをはじめ全員記者会見に行っちゃいましたので、私一人で留守番していたんですね。で、記者会見が終わったのがたぶん、テレビとかでニュースが流れ始めたのが午後8時くらいだったと思うんです。そのとたんにもうじゃんじゃんじゃん電話が事務所にかかってきまして、てんてこまいしたのを覚えてます。

ちょっと話進めますと「ベ平連ニュース」12月号はイントレピッドの話が満載なんですけども、その中で、ベ平連がどうしてこういうことをやったのかという声明文を出した。その声明文の主体が「ベ平連有志」。個人の連名ではなくて、「ベ平連有志」という名義での声明を「ベ平連ニュース」紙上に発表したわけです。そしたら、そんなに大きな問題になったわけではないんですが、「そもそもベ平連ってのは有志の集まりで、有志の運動だと。そのベ平連の中の、そのまた有志ってどういうことなんだ」というような批判が出てきました。吉川さん「あ、これちょっと一本取られたかな」みたいな顔で、「ちょっとやっぱまずいよな、これ」みたいなことがあった。ただ、そう言うようになった気持ちはわからなくはないんです。というのは、それまで「脱走兵」という言葉が使われていたのは1945年の、第二次大戦までのことだろうと思うんです、ほとんどの場合。それで脱走兵という言葉が持っているインパクトといいますか、社会的にどういった影響を与える言葉であるのかということは、ベ平連の「内閣」の人たちは当時高校生とか、鶴見俊輔さんは成人されていましたが、中心のメンバーは中・高生くらいの方がほとんどだったので、非常にマイナスのインパクトの大きな言葉だったという記憶がおそらくおありなんだろうと思うんです。ですから、ベ平連と「脱走兵」が結びつくことで、ベ平連がどういう評価を受けるのか、社会的にどういうふうに見られるのか、いまひとつ自信がなかった。つまり、脱走兵と結び付けられることでベ平連そのものが叩き潰されるという恐れも抱いたと。それでも、そうなってもいいという覚悟を決めて始めた。そのことは後で取材した時に何人からも伺いました。だからもし社会的に指弾を受けるような立場になったとしても、それは自分たちだけが受ければいいという、そのためにベ平連有志という形をとったのだろうと私は思っているんです。

それについては、日本の社会の反応は相当に好意的であったので、なんとなくまあ、そのまいうやむやになったっていうか、それほど大きな問題にならなかった。まあベ平連が全国区になる大きなきっかけとなったと思うんです。だから JATEC というグループを作ってやろうと思いついた原因の一つに、有志問題はやっぱりあったのかなと思います。運動のやり方からして、誰でも来ていい、好きな時だけやっていい、というベ平連本体のやり方と、やっぱり脱走兵援助は「誰でもどうぞ」っていうことではやっていけない種類の運動であると。だから運動の哲学というか原理そのものが、ベ平連本体と切り離して別の物としていかないと、ベ平連の中の一つのグループでは、ちょっと切り抜けられない、運営できないような事態が起こるのではないかというようなことを考えて、JATEC を生み出していったのではないかと想像してるんです。切り離さないと、とっても二刀流ではやっていけないという実務的な側面は もちろんあったと思うのですけれども、それ以上にベ平連がやっているのと同じ原理で JATEC を運営することは不可能だろうという見切りがあったのかなと、今は考えているんです。

大野：いま画面でお見せしているのが初期の脱走兵たちの写真です。左側がイントレピッド号からの脱走した有名な4人、右側がそのあとに脱走した兵士になると思うんですが…

関谷：第2陣ですね。

大野：この中で、関谷さんのご経験でいうと、金鎮洙。写真のいちばん左側の、韓国人でまだこの時はアメリカ国籍は取得していなかったけれども、米兵として従軍していたという人ですが、実際にこういった脱走兵に触れ、出会い、アテンドしたりいろいろな支援をされた。脱走兵って実際はどういう人たちだったのか、どんな印象をお持ちになったのか、ぜひ聞かせてください。

関谷：イントレピッドの4人に私は当時会ってはいないんですけども、いろいろ声明文とかフィルムも残っています。そういう資料を見ると、日本の反戦運動家が思い描くような理想的な反戦脱走兵だったと思うんですよね。品行方正だし、航空母艦の乗組員ですから、自分の手を血で汚したことは直接にはない。非常にしっかりした受け答えをする、という誰からも、「ああ、こういう人たちが反戦脱走兵なんだ」と思われるような人たちだった。JATEC は非常に幸運なスタートが切れたんだろうなと思います。その次の6人も、とくに金鎮洙はすごくまじめな人で、いろいろなことを考えていた。声明文なんかもたくさん書き残しているし、反戦の志を非常に強く持っていた人だったと思います。ただ、朝鮮戦争の孤児でアメリカ人の養子に迎えられて渡米したということなんですけど、どうも後で本人とか韓国の人たちから聞いたところでは、ほんとうは孤児になっていなかったんじゃないかという話が出てまして、つまり自分のその時の境遇に不満があるというか、このままではうまくいきそうもないということで、孤児をいわば騙ってアメリカ人の養子になることに成功した、みたいなことがどうやらあったらしいと、その時たぶん5歳とか6

歳とかそのくらいの年齢だったはずなんですけど、そういったちょっと屈折したところのある人だったのかなって思います。非常におとなしい人でしたし、まあ風貌は、口さえ開かなければ日本人と区別が付きませんので、街を歩いたりもしてましたし、わりと自由に過ごしていた。この人は、興味のある方は調べていただいたらいいんですが、日本で大きく報道されたいちばん最初の脱走兵ですよ。67年の4月に脱走して、紆余曲折があつてキューバ大使館に逃げ込んでそこで半年以上ずっと一歩も出ずに過ごしていた。キューバ大使館の中でイントレピッドの脱走のニュースを聞いた。それで「ああ、こういう手があるんだ」ということでキューバ大使館から出てきたということだった。ベ平連としては、イントレピッドの後に受け入れた最初の脱走兵が金鎮洙になります。その後に次々と5人の人たちが現れて、4月の末かな、ぐらいに北海道からソ連に、漁船に乗りこませて脱出したという方法の第1号の人たちになります。

## ◎JATEC の活動

大野： 関谷さんはこの JATEC の活動にどういうふうにかかけられて、最初はどのような活動から始めていったんですか？ JATEC は表(おもて)のベ平連とは異なる組織原理、運動原理で動いている別働隊で、ある意味地下的な活動もする部分だと思うんですが。

関谷： 最初は京都に連れて行っていた金鎮洙を、「東京に連れ戻して来い」と吉川さんから言われて、吉岡と二人で京都に行って、清水寺なんか見て、それで誰にも顔を合わせずにすむ寝台列車で、京都から、確か東京だと人目につくかもしれないからと横浜で降りて、そこから電車で東京に行ったというような記憶があるんですけど。それが私の JATEC としての活動の最初でした。

大野： 吉川さんから「行ってきてくれ」と声がかかったと。そういう時に必要なお金などはその場で渡されるものなんですか？

関谷： そうですね、その時々で何千円とか必要経費を渡される。それで京都に行って、京都でも鶴見俊輔さんからお金いただいてご飯食べたりして、それから帰ってきた。

大野： 当然携帯電話もない時代ですが、具体的に「この家に迎えに行って、ここに戻ってくるように」と、迎えに行く場所や行き先を明確に指示されるんですか？

関谷： そういうことです。途中で何かあつてもなかなかすぐ連絡が取れないので、途中で何かあつたら自分たちでなんとかするという。そういう意味では緊張はしますね。何かあつたらどうしようという思いが、やはりつきまとうことになります。

大野：金鎮洙さんとは会話はされたんですか。

関谷：まあ多少は、話はしました。

大野：当然、英語で。

関谷：まあ大した英語はしゃべれなかったんですけど、鶴見俊輔さんの秘書の方と吉岡と僕と4人で京都の町をあちこち行きながら、ときには筆談もまじえたり、辞書を引いたりしながら、みたいなことですけど、少しずつ話をしました。

大野：テレビや新聞などで報じられているベトナム戦争に触れるのとは違って、生身の米兵と出会うというのはまた違う経験だと思うんです。出会った時の感覚であるとか、どういった強い影響を、米兵から受けたりしたんでしょうか？

関谷：金鎮洙は少し年上でしたけど、その後はほぼ同年代です。中には自分より一つ二つ年下だったりすることも多くなってくるんです。やはり同じ年代の人間がこういう場所に立たされているということはとても衝撃的なことで、日本は45年以降、戦争に直接的には参加していないわけで、私も戦場に駆り出されることなく過ごしてきている。自分が戦場に立たされるということを具体的にイメージしたことはなかったんですよ。米軍の脱走兵を目の当たりにすると、私と立場が入れ替わっていても少しもおかしくないって思えてきて。だから自分がもしそういうことに追い込まれていったらどう思うんだろう、どういうことができるんだろうとか、答えの出る問題ではないですけど、ずっと心の中に残っている問題です。だから非常に、やんちゃというか、手に負えないような脱走兵もその後出てきますけれども、やっぱりそこは「なんだこいつら…」と思いつつも、「こいつらのほうがよっぽど俺よりしんどいはずだよなあ」というのがどこかに引っかかっていて、100%怒りきれない。それはずっと終わりまで、いまもって解けない問題、ずーっと考え続けることになる問題というか。どこかで立場が入れ替わっていてもおかしくない、自分がそういう立場に立たされるということが現実にならないことではないんだという思いですか、それを実感したことが個人的にはいちばん大きかったと思います。

大野：JATECでの活動が始まるなか、関谷さんは大学に進学されて、京都でJATECの活動を続けられることになると思うのですが、京都での大学生活、ベ平連やJATECでの活動の様子を聞かせていただけませんか。

関谷：京都ベ平連のことも少しお話しますと、京都ベ平連の代表は鶴見俊輔さんだと思っている方は意外と多いんですよ。確かに京都ベ平連で何かあると鶴見俊輔さんの名前も一緒に新聞に載ったりすることが多いものですから、そういうことが多いんですけど、京都ベ平連は

最初から最後まで京大人文研の飯沼二郎さんが代表を務められていたんです。鶴見俊輔さんは直接のかかわりを持たずに過ごされた。もちろん直接の関わりがないっていてもいろいろな相談も受けられましたし、講演会とか集まりに参加することもしょっちゅうありましたけれども、京都ベ平連の運営に口を出すことは、鶴見俊輔さんはなかった。確かに鶴見研究室が郵便物の宛先になったことはかなり長い期間あるんです。それはいわば私書箱的に使わせてもらったってことで、京都ベ平連は事務所を構えることがずっとありませんでした。どこかに行ったら誰かに会えるっていう場所は、同志社の学生会館の中にあった同志社ベ平連のボックスがいちばんみんな集まりやすいような場所だったのかなという気がします。

鶴見俊輔さんにとって、自分が手足として使える学生はいなかった、当時。学生からすれば、何度も顔を合わせている人であっても、研究室まで行くっていうのは敷居が高い。用もないのに気軽にちょっと行くっていうのはかなり抵抗があるような関係が最初のころはあったと思います。

そういうときに、JATEC の活動がどんどん激しくなりそう。だけど自分が思うように使える若者は周りにはいない。そういうところに私がたまたま東京から京都に行くことになったので、「これはちょうどいい、使い勝手のいいのが来た」という感じだったんだろうと思います。とにかく、こちらの仕事だけやってくれと。それからあまり表に出て顔を知られるようなことがないようにしてほしいというようなことを言われました。「わかりました」といってやっていたので、もしそういうことがなければ、私もあの当時の熱気ですから、どこかの学生運動に引っ張られて…ということはあったのかな、という思いもあるんですけども。とにかく自分としては脱走兵のことだけやる、ということで、学生運動からは意識的に遠ざかっていたということがあった。

当時は立命館のキャンパスと、同志社の鶴見研究室とはすごく近くにあったんですね。御所のすぐ東に立命館のキャンパスがあって、御所のすぐ北側に同志社大学があって、鶴見研究室があった。この写真の緑のところは御所なんですね。で、赤い丸のところは立命館のキャンパスがある。同志社大学の鶴見研究室は御所のすぐ上、北側にあった。御所を斜めに突っ切ったら、10分も歩かないで行けるんです。だから昼休みにちょっと足を伸ばして行ったり、授業が終わってから行ったり、授業が休みのときに行ったり、ほぼほぼ、とくに脱走兵が京都に誰かいるというときは、ほぼ毎日のように鶴見研究室に御用聞きに行って、「何かすることありますか」みたいな。「立命の学生なのか同志社の学生なのかわからんな」みたいなこと言われたりもしました。

大野：立命館大学には68年の4月に入学ということで、ものすごい年に京都に来られています。先ほど学生運動からは意識的に距離をとっていたということでしたが、ご自身の中で葛藤はなかったんですか？キャンパスで展開されてることに参加してみたいとか、ベ平連よりこういう運動やってみたいとか。

関谷：意外なほどなかったですね。というのは、これは吉岡忍が言ったのかな、「ベ平連は自分に



とって大学だった」って。「内閣」の大人たちとか、鶴見俊輔さんもそうなんですけど、あの人たちの話を、かなり頻繁に予備校生の頃に聞いていたわけですよ。そうすると、大学に入っても学生の話してるのが全然おもしろくないっていうか、全然魅力を感じなかった。比較するのはかわいそうぐらいなんですけれど、大人たちの話を聞いていて「なるほどな、そんな見方があるのか」と非常に感心することがたくさんあったけれども、周りの学生の話聞いても全然そういう感動がない。「なんかしょうもないこと言っているな」。自分がしょうもないことを棚に上げてですけども、そういうふうな気持ちだったので、デモをしたいと思ったことは時々ありましたけど、学生運動に入りたいと思ったことは一度もなかったですね、逆に。それはすごく大きな点だった、今考えるとすごく大きな点だった。学生運動に魅力を感じなかった。はるかにベ平連の大人たちのほうが魅力的だということだったと思います。

大野：大人たちの話を聞いて、「ああそんなこともあるんだ」と思った、という具体的なエピソードはありますか。

関谷：具体的というか、ベ平連のなかで、自分だけってことではないんですけど、何かいろいろなことを考えて「こんなことやってみたい」とか「あんなことやろう」とかいう話が出てくるじゃないですか。ベ平連の大人って頭ごなしに「そんなのダメだ」とかいうんじゃなくて、「それでこんなふうな場面になったらどうすんだ？」みたいな聞き返し方をするんですよ。すると、そんなこと全く考えずに、一直線に自分の都合のいいほうにばかり考えてプランを立ててると、「もううまく行かなくなったときにどうすんだ」みたいな問いかけをされると、「ん？」「ん？」「そんなこと考えてなかったけど、どうしよう？」みたいな、フィードバックさせられることがたびたびあって、その辺が学生運動とのいちばん大きな違い。学生運動はせいぜい上下4～5年ぐらいですよ、年齢の幅が。でもベ平連は、一世代、二世代上の人たち、もう経験豊富な人たちから、たくさん失敗も経験してるような大人たちから、「そんなこというけど、うまく行かなかった時どうすんの？」みたいな、ちょっと茶々を入れられると、「うーん、それやっぱもう一度考えなあかんなあ」ということで、もういっぺん自分で考え直させられるという経験をたくさんした、ということ。やっぱ思いつきをパーッと実行するんじゃなくて、それでうまく行かなかったときにどうするか、ということをちょっと考えて、セカンドオピニオンっていうか、Bプランっていうか、そういうものを持ちながら動くような癖がつき始めたということなのかもしれません。

大野：ちょっと事前にアナウンスできてなかったかもしれませんが、今日のプログラムとしては80分ほど関谷さんのお話を伺って、それからの参加者の皆さんとの質疑応答に聞いていこうと考えていますので、あと30分弱ほど、関谷さんの話をみなさんと一緒に聞いていきたいと思えます。チャットに書き込まれた質問なども、少し確認しながら話を伺っていこうと思っていますので、もしよろしければ書き込んでいただければと思います。

さて、JATECの脱走兵支援運動は、「人民の海に支えられた運動である」というように言

われることがあります。先ほど、「脱走兵」という言葉に対する否定的なイメージが社会の中にあると思っていたけれども、むしろ肯定的な反応が多かったんだ、というお話もありました。

JATEC の脱走兵を具体的にかくまっていく中での、この「人民の海」とは、どういうものだったと考えればいいのでしょうか？

## ◎脱走兵を支える「人民の海」

関谷： JATEC という、グループというか、組織とまではちょっと言えないと思うんですけれども、いちばん大元で脱走兵の受け入れを担当しているのは、東京の人たちが中心だったわけです。その人たちのスクリーニングを通過した人をしばらく滞在させ続ける、というステージが次に待っているわけですね。そうすると、あらゆるツテを駆使して泊めてくれる人たちを探すという作業を当時の大人たちはやっていたわけですね。あまり長い期間一箇所にとどまるとやっぱり安全上の問題もあるから、2〜3日ぐらいでどんどん次の所に移動しながら面倒を見てもらう、というネットワークを作っていかないといけない。私たちは当時学生ですから、泊めるスペースもないし、連れて来たところでご飯作って食べさせることもままならない。やはり家を構えている大人の人たちを探し出して、探し出して、「ここに行け」って言われたとおりにそこに連れて行くという。活動というより、作業ですかね。そこでベ平連の「内閣」とはまたちょっと違った、実際の大人たちの暮らしぶりを目の当たりにすることもけっこう多かったですね。脱走兵からちょっと離れますけど、ああこんな暮らし方をしている人たちがいるんだ、といういくつかのサンプルを間近に見ることができたというのは、すごく自分にとっては大きかったです。

「頼まれたから泊めてあげます」という人ももちろんいるわけですが、積極的に関わりたい、なかなか街頭にデモに出ていろいろ勇ましくやることはできないけども、脱走兵をかくまうということであれば自分にもできるっていうような形での、ベトナム反戦へのかかわりを選んでる人たちもいるということです。そういう人たちは、ただ言われたから預かって、言われた時間、日にちが過ぎたから返す、というだけではなくて、「なんかとても忙しそうだから俺の友達にも話をしてみたから、そこに連れてってみるか」みたいな話を次々に紹介してもらえるんですよ…そんなことがたくさんあった。だから本当に、中枢にいる人たちは脱走兵が今どこにいるかの確につかんでいる状態ではなかった。誰かに聞いて、その人が次の誰かに聞いて、その人がまた誰かに聞けば、どこに泊まっているかはわかるけれども、どこに泊まっているか東京は直接には知らない、という状態は珍しくなかったです。そういう形でたくさんの自立的なグループがあちこちにできてきて、例えば京都も西宮とか米子とかいくつかのグループがあって、とにかくそこに連れていけば預かってくれるという。詳細にはどこに泊まっているかは知らないんです、京都も。「だれだれさんに頼めば2週間3週間預かってくれるよね」というところがいくつかできた。東京もそうだったと思います。だからそういう形で、組織っていったら組織の体をなしてないのかもしれないですけども、そういうつながりで乗り切っていたということだったと思います。

大野：現在、日本の多くの地域では、米兵という存在は日常から非常に離れています。また、沖縄の基地問題であるとか、各地での米兵・軍属による事件や事故が報道されていますので、自宅に兵士をかくまうということはあまり想像できない時代だと思うんです。ベトナム戦争当時はなぜそれだけの人たちから、「ああ、じゃあ次のかくまう先探しておいたよ」とか「私の家に来ていいよ」という反応があったんでしょうか？受け入れた方々にとって、米兵ってどういう存在だったんでしょうか？

関谷：基本的にはベトナム反戦の志っていうか、そういう運動に加わりたい、意思表示をしたいということが根底にはあったんだろうなと思います。それと、実際に会ってみれば、一家を構えている人たちはだいたい脱走兵よりも年上の人がほとんどですから、自分より幼い子ども達が困っている、何とかしてやろうという気持ちも当然あったらと思うんです。もちろん今に比べればはるかに外国人はたくさんいた時代ではなかったのですが、相当に目立つのは確かなんですけど、それでもまあ、留学生だっただけでございまして、それがひとつと、それと今から思えば、留学生だという話を聞いた人の100%がそう信じたとはちょっと思えないんですよ。だから、ひょっとしたらこの人は脱走兵かもしれないと思いながら、隣近所に見慣れない外国人が来てるけども、ひょっとしたら脱走兵なのかもしれないね、ぐらいの話はあったらと思うんです、あちこちで。だけどそれで通報された例が、全くないわけではありませんが、通報を元に逮捕されたというのは聞いてないんです。知っていてもそれを言いふらしたりしなかった人が非常にたくさんいたんだろうなあとと思います。

それともう一つは、当時、私の年表に、あまり関係なさそうなことも書いていますが、東大全共闘の山本義隆さんとか、日大全共闘の秋田明大さんとかが、同じ時期に潜伏してるんですよ。だからその人たちをかくまっている人たちも、同時期にいたんです。それがバッティングしかけたこともあるんですね。同じ人のところに、「山本義隆さんかくまって」、「脱走兵かくまって」、と両方からってことは現実にあって、で、「この人なら受けてくれるだろう」という人から理由も言わずに「ちょっとだめ」と言われちゃって、なんであの人受けてくれないのかな、と思ってたらずいぶん後になってから、実はあのとき山本義隆さんが泊まってたんだというようなこともあった時代でしたよね。今に比べればしっちゃかめっちゃかに揺れていた時代だったということが、一つよかったことだったのかもしれない。

大野：その後、ソ連経由の脱走ルートが使えなくなっていくですね。1968年11月、ひとつは脱走兵が逮捕されて関係者のルートが警察の側に知られてしまう。また、ソ連側が「今後は将校か原子力潜水艦の乗組員以外は来させるな」と拒否をした。そういう中で脱走ルートが閉じて、JATECが第2期へ、方針転換していくこととなります。基本的には、かくまう運動から、基地、軍隊に兵士を帰して、その中での反軍、反戦運動を支えていくという方針に変わっていくわけです。まず伺いたいのは、この68年11月の脱走の失敗と逮捕を、当時の関谷さんはどのよう

に受け止めたのか。また、その後の活動の様子を聞かせてください。

関谷：あのときいちばんとぼっちを受けたのは山口文憲ということになると思うんですけども、彼らが羽田を発つ前の晩、高橋武智さんの家に、メイヤーズとスパイのラッシュ・ジョンソンという男と、山口文憲と私と泊まって、次の日私が羽田まで見送りに行ったんですね。それで京都に帰ってきて、電話があつてすごくびっくりした。新聞にも、モデルガンを持っていたことについて、あとで銃刀法違反で山口文憲が逮捕されるんですけども、ある新聞の記事には、京都から来た男がモデルガンを渡した疑いもある、というようなことが書かれていて、「俺のことか」とちょっとびっくりしたこともあるんです。いずれこういうことがあるのかも、という覚悟はみんなある程度は持っていたと思うんですね。ただ、それが現実のものになってきて、第一次の人たちがスパイと濃厚に接触したということで、もう続けるべきではないだろうと人が入れ替わるということになりました。

国外脱出ということからすれば、オホーツク海が流氷で閉ざされますので、冬の期間は物理的にできないということがあるわけですよ。それもあつて11月、ちょっと準備不足の点もあつたけど急いで、もうこれを逃したら春までできないと急いだっていうことも一つあるんです。それと、話は前に戻るかもしれませんが、別にわざわざ漁船に乗り込まなくても、ソビエトが協力的であれば、ソビエトの貨物船に乗れる港は日本全国何十もあるんです。栗原さんは日本海でいくつも港を見て回って、ここならいける、ここならいける、ってリストアップまでしていたんですけども、それはソ連がOKしなかった。だから結局漁船を使って、とにかくソ連のいうことは、日本の領海から外に出せと。外に出したら後は何とかしてあげる、というのがスタンスです。積極的に脱走を援助しようという姿勢はやっぱり最初から感じなかったですね。バイカル号の時も、日本の領海から外に出ていたら、脱走兵に気がついて、船はそのままホトカまで行くよということしか言わなかった。乗船することに対する積極的な手助けは一切なかった。まともにアメリカとぶつかるつもりはなかったんだろうなって思います。利用するだけして、ということだったのかなというのが、JATEC側のソ連に対する評価です。だから評価低いですが、ソ連に対して。あれだけ助けてはもらったんですけども、感謝しているというよりは「なんだあいつら」という思いの方がJATECは、ソ連に対しては強いですね。

それからその後方針を切り替えて、反軍闘争的な方向に進むことができるようになったのは、やはり何とんでもPCS(パシフィック・カウンセリング・サービス)<sup>4</sup>が出てきてくれたってことで、日本人だけではちょっとどうにもならなかっただろうと思います。PCSの人たちが、いろいろ米兵のカウンセリングを通じて合法的な手段での闘争のしかたってものを教えてく

---

<sup>4</sup> (大野さんによる注)アメリカ合衆国カリフォルニア州サンフランシスコに拠点におき、国内外の反戦米兵を支援したベトナム反戦運動の組織。詳しくは本野義雄「方針転換」と米軍解体運動 関谷滋・坂元良江編『とどろき脱走兵がいた時代』(思想の科学社、1998年)、大野光明「太平洋を越えるベトナム反戦運動の軍隊「解体」の経験史—パシフィック・カウンセリング・サービスによる沖縄での運動を事例に」『立命館平和研究』20号、2019年を参照。

れた。私たちにも、ベ平連自身にも教えてくれたってということで、方針が転換できたということ。そういう展開ができなかったら、本当に困って自滅したかもしれません。どうにもならないという状況が続いたと思います。武智さんがやった偽造パスポートにたどり着くまでの苦労は非常に私も評価します。それで救われた人が現実に2人いるわけですから、評価しますが、やはり運動の大きな流れからすれば、反軍闘争に切り替わっていったってということで正解だったのかなと思ってます。

## ◎反戦喫茶「ほびっと」（岩国）、JATEC 第2期、ベトナム戦争終結

大野：その後、反軍闘争の拠点が各地にできていく。それは今お話にあった PCS との連携もありながらのものでした。関谷さんの活動の中では、岩国基地のすぐそばに反戦喫茶「ほびっと」を京都のベ平連と福岡のベ平連の関係者が一緒に作り上げていく、ということがあったと思います(1972年2月25日開店)。関谷さんの関わり方を少し伺わせてください。

関谷：「ほびっと」、もちろんちょこちょこ顔を出しては手伝うことはやってきましたけれども、個人的に、私の立命の同級生が日本赤軍のメンバーだと思われて、まあ実際そうなんだったと思いますけど、私個人が、ベ平連と関係なく公安からかなりマークされる一時期がありまして、あまりベ平連に近づきすぎると迷惑かかるかもしれないなっていう時期があって、それで、「ほびっと」の立ち上げの頃はそんなに頻りに顔出しをしなかった。意識的にちょっと遠ざかっていた時期でもあるんです。

私個人とすれば、73年に卒業して、小野弁護士の事務所に就職したということがありまして、小野弁護士が「ほびっと」の家宅捜索に対する国家賠償請求の裁判を担当していたものですから、私も半分仕事・半分活動みたいな形で「ほびっと」裁判とずっと、終わるまで付き合っていた。ですから、一般にベ平連の活動家は73~4年くらいでベ平連活動、まあ解散というような形で終わっていくことがほとんどだったわけですが、私の場合は、「ほびっと」の裁判が全部片が付くのは1980年の夏ですので、そこまではなんだかんだベ平連や「ほびっと」というのがついて回って、ベ平連の活動も続けていたというような、ちょっと変則的な関わり方ってことになるかと思います

大野：JATEC 第2期のなかでは、関谷さんはどういった活動をされていたんですか。

関谷：そんなに第1期みたいに華々しくということではなくて、例えばノーム・ユースがでてきて、一度脱走して何ヶ月かで戻って、軍隊内での抵抗を組織するようになって、それで軍事裁判にかけられて、それで日本人の弁護士も、小野弁護士とか、弁護人として出廷するようになった。俊輔さんやノームを家にかくまった神谷康子さんが、証人として出廷するようになる。そのときに「ほびっと」は福岡と京都が責任もってやるっていう分担でやってたわけなんですけど、手

が足りないというので、東京の吉川さんとか小田さんとか、良行さんとかも来るようになった。事務的なことをやる人間があまりいなかったし、私は東京の人たちとも顔が繋がっていることもあって、事務作業的なことになると「お前やれ」っていわれることは、なんだかんだ続いてたという感じはありました。

大野： かくまっていた脱走兵は、最終的に 71 年の 8 月に空路で、先ほどお話しされておられた高橋武智さんがそのつくりかたを学んだ変造パスポートによって国外脱出するわけですが、この時のことは覚えていらっしゃるでしょうか？最後の脱走兵が出たということをごんごんに受け止めたんでしょうか。

関谷： それはしばらくあとになって聞かされたと思います。とくに最後の「神田君」と呼ばれていた脱走兵は京都にも長くいた人だったので、感慨深いものがありました。初志貫徹で「絶対戻らない」と言い続けた男だったので、とりあえず願いが叶ってよかったなっていうのが最初の思いでしたね。高橋さんが中心になってやったということで、高橋さんについてベ平連以外のことでいろいろ話題になったりもした。高橋さんがヨーロッパで何をしてきたかということについては、私は十分なことはわかっていないし、いちばん親しかった本野さんにしても聞いていない話はたくさんあるだろうと思うんですけども、それはそれとして、高橋さんがやったことの努力とか意義というか、それは本当に敬服に値すると今でも思っています。高橋さんについてわからないことはないわけではないですけど、それはおいといて、JATEC の人間として最後まで親しくお付き合いさせていただきました。

大野： ベトナム戦争は 73 年 1 月の和平協定の発効と、75 年のサイゴン陥落、解放で一応終わっていきってということになります。ベトナム戦争が終わったこと、その終わり方も含めて、当時の関谷さんはごんごんに受け止めていたんでしょうか。

関谷： ベ平連自体は、ベトナム戦争が終わったら終わるんだよというようなことは、もう最初から折に触れてみんな言っていたことです。それは自戒も含めて、ということなんだろうと思いますけども、これだけの人数が集まるようになった運動を、なぜ他で使わないのかみたいな言い方をされることもありましたし、そう思う人ももちろんいたと思うんですけど、やっぱりそれは違うっていうのが鶴見俊輔さんの考え方。人の善意を利用するような政治的な、まあ引き回してっていう言い方が合っているのかどうかわかりませんが、それはやっぱり違うんだと、そういうことはすべきではないというのが一貫した俊輔さんの考え方でした。次の問題が起こったら、その問題で人を集めるべきだと。ベ平連の時の何百分の一しか人は集まらないかもしれないけれども、それは当たり前なことなんだ。ベ平連が何十万人集めることができた。その何十万人を自分がどうにかできると思うのは、それは思い上がりだよ。というようなことは折に触れておっしゃってましたので、そういうもんなんだな—という感じでした。別にもったいないとは思わなかつ

たですね。

## ◎ベ平連以降

大野：わかりました。少し話が先に進んでしまって恐縮ですが、関谷さんはベトナム戦争後も京都の市民運動、たとえば1998年頃からは「ベトナムの子ども達を支援する会」<sup>5</sup>というNGOに関わっておられます。ベ平連でのご経験がその後の関谷さんの人生や運動にどうつながっているのか、という点について伺えればと思います。

関谷：大まかに言ってしまうと、ベ平連の67年から69年70年くらいまで、自分がベ平連で受けた恩恵とでもいいでしょうかね、実にいろいろなことを経験させてもらったと。それも、使い捨てにされることなく処遇してもらったという思いがすごく強いんですよ。本当に恵まれた活動をさせてもらったという気持ちがある。それとベ平連が73年、74年くらいで終わってしまったって、自分より若い人たちに引き継ぐ機会がなかったわけじゃないですか。それはちょっとやっぱりもったいないと、自分としても物足りないし、やっぱりこれだけいろいろなことをしてもらったのにそれを自分一人で終わって、なしにしてしまっただけじゃあないな、という気持ちがありまして、何か伝えたいこと、伝えられることがあるんじゃないかっていう思いはずっとなくならなかったですね。それだけの、言ってみれば恩を受けているという思いは今もあります。

大野：ベ平連でのご経験のなかで下の世代に伝えたいと思ったこととは、どういったことなのでしょう？運動スタイルとか物の考え方ということですか？

関谷：そうですね、直接的にはあの時代、ちょっと行き先を違えたらものすごく結果が違ってくるような時代だったと思うんですよ。若者にそれだけの判断を期待してもそれは無理でしょう。人生経験もないのに。だから他の道ではなくてこの道を選んだというのは本当に偶然だった。形の上では自分が決断して選んだことであっても、本当に偶然の産物みたいな、賜物みたいなものだから、たまたま私がそんなに酷い目に遭わずにここまで人生進めて来られたっていうのは、本当に偶然の、幸運の連続だったという思いが自分にはあって、それはたんなる幸運ではなくて、やっぱりいろいろ教えてくれた大人たちから、物の考え方から、例えばうまくいかない時にどうするか一度考えてからやりなさいみたいな話も含めて、そういった考え方を教えてもらったことでいろいろの幸運も舞い込んできたのかなっていう思いがあるんですね。

ベトナムと関わるようになったのは、ごく単純にこれだけ自分を突き動かしたベトナムっていうものを一度は見ておきたいという思い、好奇心があったということだと思います。そして行ってみたところが想像以上におもしろかった。これもベ平連のときの体験と通ずるものがあると思う

---

<sup>5</sup> SVCA ベトナムの子ども達を支援する会 ウェブサイト「ようこそ、SVCAのHPへ」  
<http://svca84.g3.xrea.com/index.html> (2022-08-03 最終確認)

んですけど、おもしろかったというか、そういうことがあるので続けているという。ここ2～3年はコロナで行けなくなってますけども。そういう何か特別ベ平連とのかかわりっていうのは、そういうことかなと思います。

大野：そろそろ時間も来てますのであと二つだけ。一つ目は『となりに脱走兵がいた時代』についてです。これは大著だと思うんですけど、このとても貴重で膨大な記録と記憶を残そうとされた、そのモチベーションや編集と執筆の過程について、少しお話を頂けたらと思います。

関谷：残そうと思ったって、別に私が思ったわけではないんですね。きっかけは鶴見俊輔さんが思ったってことです。私は「京都をまとめろ」ということだけ頼まれたんですよ。京都をまとめろと言われてたら、私がいちばんよく知っているから、それは自分がやらないとしようがないだろうなあとというふうに、始めさせられたという気分でした。最初は。

それから、年表をちょっと見ていただくと、1995年の欄で、2月から6月まで何もしてないんですよ。これ空いてるのは、1年ちょっと動いてみて、京都だけやるつもりで動いてるわけですから、他の地方は他の人がやるはず、やるはずというかやるべきだと思ってるわけですよ。ところが、誰も何にも動いてなさそうだと。「なんなんだこれ、俺しか動いてないじゃないか！」と、ちょっとやる気が失せた時期ですね。この数か月何もしていないという。でもだんだんその頃から東京も少しずつ動いてくれるようになったのがひとつと。だんだんおもしろくなってきました。話を聞くことが。私は俊輔さんの近くにいる、俊輔さんからいろいろ伝え聞いてましたので、一介の若者にしてはそうとういろいろなことを聞いていた人間でした。本をまとめるには、それは役立ったんですけども、それでも知らないことは山ほどあって、自分がかかわってたのはごく一部。

うまい例えかどうかわかりませんが、膨大な数のピースの、大きなジグソーパズルがあって、自分が持ってるピースはほんの10個か20個くらいしかない。そうしたら、どこに置いたらいいか、10個か20個ではどうにもならないじゃないですか。JATECの活動に参加した人たちのほとんどはそういった状態だったと思うんです。だから皆さんJATECについて語るが多くなかったのは、黙ってしようと申し合わせて始めたことだから黙っていたっていう一面はもちろんあると思うんですけども、話をしようにも、自分のやったことがどういうところで、誰と、どんなことと、どうつながっているのか、自分でもよくわかってない。話をしようにもどう話していいかわからないっていうことがあったのではないかと。自分がそうでしたから。概略的なことは大まかにわかってた立場には居させてもらったんですけども、それでもわからないことは山ほどあって、系統立てて人にうまく説明することができない状態がずっと続いてたっていう思いがあって。それが少しずつ、ジグソーパズルのピースが、いろいろな人から話を聞くことで、集まってくるようになった。そうすると少しずつ埋められてきて、ああ、こんなとこまで埋まってきた、ここもつながるかもしれないって少しずつ見えてきた。そうすると興味がすごく湧いてきた。もっと調べたい、もっと知りたい、それがモチベーションになったと思います。このあとで少しは拍車か



かかってきた。「俺ひとりか」「いやだなあもう、他の連中何やってんだ」っていうような気持ちから、やれるところまでやってみようというふうにだんだん変わってきたことがいちばん大きかったと思います。最初からこんな本作ってくれてと言われてたら、とてもじゃないけど受けてないでしょうね。「できるわけないでしょ、そんなこと」っていっておしまいだったと思うんです。少しずつ、始めてたら周りも少しずつ動いてくれるようになってきて、だんだんいろいろわかってきた。とてもおもしろくなってきたってのが、実際のところだったと思います。

大野：私自身が調査や研究をしてる時のワクワク感とどこかでつながるような気もいたしました。最後にもう一つ、ちょうどウクライナで戦争が行われている状況でベ平連をどう考えるのかということ伺いたいと思っていたのですが、もうそろそろ時間ですので、このあとの質疑応答に回したいと思います。今日で全てお話を伺えるようなものではないということにはよくわかりましたので、またの機会にとも思っています。とりあえず私の方からは、これで一度終わらせたいと思います。市橋さんにバトンを戻します。関谷さん、どうもありがとうございました。

関谷：ありがとうございました。

## 質疑応答

市橋：関谷さん、大野さん、どうもありがとうございます。もう残り時間もあまりないのですが、皆さんからのご質問もありますし、短い時間ですがやとりができればと思います。今大野さんから最後にコメントがありましたように、とくに最近ですね、アフガン、ミャンマーからそれと今のウクライナと、社会、それに対する日本の対応などを見ていると、社会の軍事化というか、そういうものがひたひたと押し寄せているような感じがとても強くあって、あらためて当時の JATEC の活動などをほんとうに考え直す、あるいは受け止めることの意味は大きいと思っています。では、チャットのご質問ですが、まずはこちらから。「関谷さん、ベ平連と出会わなかった人生って考えられますか」？

関谷：今となっては考えにくいですね。福沢諭吉が言ったんではしたかね、明治維新の前と後を思い起こして、「一人の人間が二つの人生を生きたようだ」<sup>6</sup>ということをやったと思うんですけど、それと同じように、ベ平連に関わって以降の自分とそれ以前の自分と全く違う人生だって感じることがあります。ベ平連と関わってなかったらどうなってたんでしょうね。連合赤軍が何かに入って野垂れ死んでいたかもしれないですし、殺されていたかもしれないと、真剣にそう思うことがありますものね。そういう可能性はゼロではなかったと思うんですね。あの時代は。

---

<sup>6</sup> (関谷さんによる注)「一身にして二生(にせい)を経(ふる)が如く」(『文明論之概略』福沢諭吉著)

市橋： それではどうぞご質問ある方、チャットでも、マイクをオンにさせていただいてもかまいません。どうでしょうか。——皆さん、すぐには難しいかもしれませんが。今日、『となりに脱走兵がいた時代』の編集をされておられた N さんがお越しと伺ってますけども、本を作った時のこととかお話ししていただけることがあれば、ちょっと口火を切っていただけないでしょうか。

N(抄)： 思想の科学の社員として、仕事として受けた。自分も 86 年ぐらいからいくつかの運動を始めていたので、かつての運動を記録したいという気持ちはあったが、少し考える時間がほしい。

市橋： それでは、一つチャットの方のご質問を。「関谷さんがベ平連に取り組んでいたとき、同時並行に全共闘運動があった。当時、関谷さんがベ平連の矜持を保っていたのは、どんな自負があったからか」？

関谷： 直接的には鶴見俊輔さんからいろいろ言われていて、「まあ学生運動で、デモやるくらいのことやったらいいと思うけども、あまり深入りして、ちっちゃなグループのリーダーみたいになるのはつまらないよ」みたいな話をちょこちょこ聞かされていたものですから、確かにクラスメイトは何人も全共闘に行ってますし、討論みたいなことはしょっちゅうやっていましたけれど、自分がベ平連でやっていることを置き去りにしてそっちに行きたいと思ったことはないんですよね。そんなに全共闘の言い分に魅力を感じてなかったっていうのが正直な思いです。「がんばれよ」という気持ちはありましたけれども、「俺も一緒になってやろう」というところまでは…それよりはベ平連の、JATEC の運動の方を自分はやりたいという思いのほうが強かったということだったと思います。

市橋： まわりにはいろいろなセクトの友達とかおられたと思うんですけど、そういうところからの勧誘とか、「ベ平連なんかやってないで」というような話がありましたか。

関谷： 入学したての頃は、たぶん東京のベ平連の事務所にも出入りしていた予備校生が立命に入学してフロントの活動家になってたりしたことがあって、だからフロントはかなりしつこく誘ってきました。「あいつなら入るんじゃないか」みたいな思いがあったんだと思いますけど。それを断り続けられたのは、やっぱり俊輔さんから「学生運動に首突っ込まないでこっちやってくださいよ」って言われてたのが、釘を刺されてたってのがいちばん大きかったと思います。そうでなかったら入っていた可能性は十分あったと思うんですけど。

市橋： それではもう一つ。「脱走兵をソ連に送るということで、日本の公安警察の監視などは厳しくなかったか」というご質問です。

関谷：それほど厳しくはなかったという印象です。年表にも書きましたけれども、日本の警察にとってあの当時いちばん逮捕したかったのは山本義隆さんであり、秋田明大さんでした、明らかに。脱走米兵については米軍の要請があったら捕まえなきゃいけないんだけど、捕まえたところで米軍に引き渡して終わり。つまり公安は自分たちの仕事とはあまり思っていなかったんじゃないかという感じがするんです。本気になって、もし JATEC を潰しにかかってきたら、それはやっぱりもたなかったと思いますよ。そこまでの熱心さは感じられなかったですね。全共闘対策、赤軍対策、第一も第二もそちらの方で。脱走兵なんか、それはアメリカの仕事だろうっていう思いが、たぶんあったんだと。本気になってたとはちょっと思いにくいです。

市橋：他にいかがでしょうか。

質問(マイク、抄)：鶴見俊輔さんの研究室に行く、日本の大学の研究室に行くのは敷居が高いという話があったが、関谷さんは俊輔さんの研究室には毎日通っていた。アメリカの大学だと教員と学生の距離が近いので、俊輔さんがアメリカで大学生活を経験したことは、学生が研究室に行きやすい雰囲気づくりに役立っていたのか。それともそれは俊輔さんだからなのか。

関谷：鶴見俊輔さんはそんなに毎日学校に行ってるわけではなくて、あの当時、週のうち半分くらいは東京に行ってました。ですから、そんなにいつでも会えるわけではないっていう、学生からしたら。直接講義を受けている人を別にすれば、著名な人だし、講師を頼むとかそういうことでは行くけども、気軽に寄って世間話をするにはちょっと気が引ける人という、68年のいっぱいくらいまではそういう感じだったと思います。だから68年の暮れに京都の JATEC を大幅に増やして学生をどんと10人ほど入れた後からは、ずいぶんいろいろな学生が出入りするようになって、俊輔さんもいろいろな話をして、「ほびっと」でも、「誰か行ってくれ」っていうような話を直接するようにもなりましたけど。それまでは恐れ多くて近づきにくいという印象が、少しオーバーにいえば、あったと思います。

市橋：ほかにいかがでしょうか。大野さんの方からも他に準備されていることがあるのでは？

大野：一つ時間があれば聞きたかったことがあります。ジェンダーの視点から見た時に脱走兵支援の運動やベ平連の運動をどうとらえ返すことができるのか、とくにこの4~5年でしょうか、研究の中では一つの大きなテーマとして出てきています。『となりに脱走兵がいた時代』や、『帰ってきた脱走兵』(第三書館、1994年)ーテリー・ホイットモアが帰ってきた時の記録ーなどを読むと、この運動を支えたのは女性たちだったという発言も多く出ていました。しかもその「支えた」ということも、文字通りに「支えた」と言ってよいのかどうか。非常に複雑な家族内の関係性、社会の中のジェンダー関係があり、その中で脱走兵をかくまうということがあったとも言えるような気がするんですが。実際にいろいろなご家庭を見ながら活動された関谷さんはどんなふうにか

えているのか、お聞きしたいです。

関谷: JATEC のつながりの作り方は、ベ平連なんかのいわば表の運動のつながりの作り方と、たぶん大きく違っていたところがあると思うんですね。表の活動のつながりの作り方は、例えばイベントであったり、そういったものをどううまく進めるかとか、組織をどう拡大するかとか、そういうことに着目したつながりの作り方だと思うんです。それに特化したような。JATEC の場合は、いちばん大変なのが脱走兵を生き延びさせることですよね。つまり衣食住を脱走兵に提供する。それがメインの活動という部分が大きいわけです。そうするとそれに長けているのは、外で働いてる、当時一般的に、ですけれども、外で働くことの多かった男よりは、家で家事全般をマネージしてる女性の方が長けているという現実があるわけなので、脱走兵を安心して預けられる人を、ということを見ると、それは理路整然とした演説のできる男ではなくて、きちんと居食住を提供してくれる女の人に支えられてるっていう面がとても大きかった現実があるわけですね。だからつながり、どこに頼むかっていう時は、表に出ていることの多い男が信用できるかどうかということではなくて、その、いわば奥さんがちゃんと迎えてくれるかどうかということを中心に見て、人を探していたという一面があるわけですね。だからベ平連の絆の作り方と JATEC の絆の作り方で、全く違う視点が必要だったという現実があって、だからそういう意味で、鶴見俊輔さんも「女性が支えた運動だ」と言っているんだと思います。

何人かインタビューした中で、その後うまくいかなかったご家庭がいくつかあるんですけども、おしなべて、外の付き合いの延長で男が脱走兵を受け入れることを引き受けて、それを家の中の奥さんに押し付けた。そういうふうに奥さんが思ってしまったところは、その後家庭がうまくいかなくなってしまった。2つ3つありました。そういうところを見ると、全くその、組織論が違っていたということが、実態の面に出てきているのかなと。そういうことをあまり理論的に意識するちょっと前の時代の話で、ケイト・ミレットの『ウーマン・リブ』っていう本が日本語で出版されたのが 71 年の 6 月なんですね。だからそれまでは、系統だったとか、理論だったフェミニズムというウーマン・リブの運動は日本にはまだまだ浸透していなかったと思います。ですからそういう理論的な支えなしに、脱走兵を支えてくれた女の人は、苦勞されたんだろうなど。自分の考えや主張が正しいのかどうか自信を持ってないで苦しんだということがあったんだろうと推測します。私たちが、PCS の活動で女性も数多く来ましたので、そういう人たちから直輸入でいろいろ叱られたという経験は何度かあって、アメリカはそんなことを今考えてるのか、みたいな関心を持ちました。ケイト・ミレットの本が出たのはそのあとなので、それを読んでなるほど、こんなふうに考えていたのかと納得したみたいな部分があって、日本の現実より、ベ平連は少しだけ先行していた気はします。

大野: ありがとうございます。とてもよくわかりました。

市橋: 運動の質の転換で、ジェンダーの観点からいろいろ検討すべき点はまだまだたくさんあるように

思いますね。ありがとうございます。もう一つ大事な質問がチャットの方に来ています。「現在は犯罪に関わることを嫌う傾向が強く、反戦デモや労働争議に関わることは、俗にいう「ヤバい」ことに関わることと同義語であり、非常にハードルが高いことと考えている人が多い。ベ平連の時代は、現在のような雰囲気強いわけではなかったと思うが、2022年に生きる私にとって、かつてベ平連の時代があったということが実感できない。何がベ平連の時代を、現代のような雰囲気に変えたのか。またこれから戦争の時代に生きることになるかもしれない私たちが、本当に戦争を止めるとしたらどのような方法があるとお考えか」。これは関谷さんにも大野さんにも伺いたいと思います。関谷さん、いかがでしょう。

関谷：もともと私は事務屋でして、イデオログでもなんでもないので、なかなか手に余るご質問ではあるんですけども。ベ平連も初期のころは文化人のお遊びだとか、あんなことやって何になるんだっていうようなことはたくさん言われてきた。それが脱走兵をかくまったことで一躍表舞台に立ったみたいな現象があったわけですね。だから何か参考になるとかということではなくて、思いつくことをいろいろやってみて、ということぐらいしか思い浮かばないんですけども。

ベ平連がもし参考になるとしたら「一人でもやる」っていうことを多くの人が貫けたと。大勢集まった人たちが、だんだん少なくなっていくのはなかなか寂しいことではもちろんあるわけですが、それでおしまいになるのではなくて、一人になってでもやるっていう人がどれだけ残ってくれるか、ということからしか出発できないのかなという感じです。答えにはもちろんなっていないと思うんで、自分でもよくわかんないところがたくさんありますけれども、そんなことを今ちょっと考えています。

大野：時間があれば関谷さんに私も質問したかった点で、今お話を聞いていて「そうか」というふうにも思いました。私から二つ応答できたらと思うんですけども、一つは関谷さんのお話の中に出てきた印象的な言葉に、脱走兵をかくまった人たちが「ベトナム反戦の選び方の一つとして」脱走兵を受け入れるということができた、というのがありました。デモには行けなくてもそういう反戦の選び方があった、と。今のようなこの状況、あるいは今後どういう戦争が起きていくかわからない状況の中で、反戦の選び方やスタイルの豊かさをきちんと認め合う、確保するってことはすごく重要なことなのではないかと思いました。「ここに行かないと反戦じゃないよね」とか、「これができない人は反戦の意思表示ができてないよね」ということではなくて、それぞれの文脈でできることを広げていくことの力というものを、今日のお話で感じた、というのが一点目です。二つ目は、そのことともかかわるのですが、ベ平連の運動を見ていると、戦争の裾野のとらえ方が実に素晴らしいというか、今でも学ぶことが多いなあと思います。これは私の感じ方ですが、ベ平連は65年の発足当時は、わりと素朴な、ベトナムの人たちに対する同情や、支援したいという気持ちから広がっていったと思うんです。それが徐々に、脱走兵の存在であるとか、基地をどう考えるのか、あるいは軍需産業をどう考えていくのか、大学の在り方をどう考えるのか、職場や働くということをどう考えたらいいのか、というように、ベトナム戦争をきっかけに、戦

争を支えている日本の中のさまざまな装置や制度を問題化していく、その回路を豊かにしていった運動だと思っています。そういう意味では、ウクライナで起きている戦争が、どういう社会、経済、あるいは文化的な関係性のもとで起きていることなのか、正当化されてしまっているのかを考えてみると、わりと目の前の生活の中に反戦の回路を、いくらでも見つけることができるのかなど。そんなふうに私はこの2週間ぐらい受け止めていました。

市橋： 質問者の方、よろしいでしょうか。

質問者： 戦争が始まっているという実感もなく、どうしたらよいかわからない悶々とした日々を送っていたが、お二人のお話を聞き、私なりに日常の生活の中から戦争に反対する回路を見つけて行きたいと思った。

市橋： それでは、Nさん、ご発言いかがでしょうか。

N(抄)： ご自分の活動に自負を持つ方が多かったことと、自分が20歳以上年下だったことで、その中に入っていくのが難しかった。とにかく中身は作ろうということですいぶんがんばったつもりだが...

市橋： 結果的にはすごく貴重な本ができて、私たちも、ほんとうにすごく重要な本っていうふうを受け止めてますけども。

N(抄)： 運動史を記録することはとても難しく、それがいちばん自分の中に残ったこと。

市橋： それは関谷さん、大野さんもお話されたように、JATECの運動の質が、合法・非合法の境もあるし、表のベ平連の活動と全然違う、ということも反映しているので、非常に形にしにくいというか、整理がしにくいということもあるんでしょうね。でもそれが反戦運動にとっては重要なポイントのような気がしますけども。大野さんいかがですか。

大野： Nさんが実感された、運動史の記録の難しさとは、編集者としてはどの辺りだったのか、ぜひ伺いたいです。

N(抄)： やはり経験を共有してないというところ。編集という立場でかかると、距離がある。自分も別のところで運動のようなことに関わっていたが、やはり隔たりがある。それをちゃんと形にするところまで持っていくのが非常に難しかった。それは自分が経験したことではないために、なかなか触れないものがあるから。それでも、それを意識しながらつくることも重要で、そこが難しいところだった。

関谷：最初の原稿を書いて読んでもらったときに、Nさんが「おもしろいなあ、続き読みたいなあ」と言ってくれたから、挫折せずに続けることができたという思いがあるのです。感謝しています。

大野：逆に関谷さんに伺いたいんですが、『となりて脱走兵がいた時代』の中で書けなかったこと、あるいは書けなかったこと、何か課題として残ったこと、差し支えのない範囲で今言えることってありますか。

関谷：書けなかったいちばん大きなところは、高橋武智さんが後で書いておられるので<sup>7</sup>、そこはもうクリアできました。あとやっぱり、全部網羅できてはとてもないという思いがあるんです。キーパーソンにコンタクトしても、協力してもらえないような場合は、そこから先には入れない部分がたくさんまだあって、それは僕の手だけではどうしようもなかったことなんですけども、それはちょっと残念に思います。一応何とか、全体の形が見えるところぐらいまではできたかなという思いはありますが、まだここも書いてないここも全く触れていないという部分はたくさんあるので、そういう意味では、少し残念な気持ちもあります。

市橋：じゃあそれは続編があるかもしれないということで。もう一つだけ、最後になりますが、チャットのご質問です。「インターネットが一般普及して変わったこと、発生したこと、なくなったことは、戦争に対して、どんなことだったか」？

関谷：あまりに違いが大きすぎて、よくつかめてない部分が多いんですね。だからどういうふうに具体的に変わってくるかっていうのは、やっぱりそういう新しい機械なり道具なりシステムなりを使いこなせるような若い人たちに考えていっていただかないと、例えば Zoom の会議に参加することは何度も経験させてもらってますが、自分が主催してどうこうするのはやったことがないんです。Zoom で会議をやれって言われても、ちょっとどうしていいかわかんない部分がたくさんある。こういう人間がどうこう考えても、とても思い及ばないことが沢山あるんだろうなあという気がします。

あの当時は緊急事態が起こってもすぐには誰とも連絡がつかない状態が予想されたので、そういう意味での覚悟はあったわけですね。少なくとも何時間かは自分一人で何とかしなければいけないというような覚悟はいちおう持ちながら動いていた。そういう事態はめったになかった、幸いなことにめったになかったんですけれども。そういったことも、今インフラ整備されてますけれども、それが 100%いつでも使えるかどうかはわからないということもあるということは少し押さえておいたほうがいいんじゃないかと。そういうときにどうするかという次善の策をいちおう頭に入れながら動くことが必要なんじゃないかなってというのが、新しい機械・道具やシステ

---

<sup>7</sup> (関谷さんによる注) 高橋武智『私たちは、脱走アメリカ兵を越境させた...ベ平連／ジャテック、最後の密出国作戦の回想』(作品社、2007年)

ムに慣れてない世代としてはちょっと心配なところではあります。

市橋：ありがとうございます。むしろ使わずに何かしなきゃいけない時の方が重要なことがあるということかもしれないですね。それでは時間も過ぎましたので、本日のセミナーはこれで終了させていただきます。アンケートへのご協力をお願いいたします。

それでは、関谷さん、それから大野さん、今日はどうも本当にありがとうございました。

---

反訳：平野泉（立教大学共生社会研究センター）



---

立教大学共生社会研究センター公開セミナー記録

「運動当事者とともにベ平連運動をふりかえる

——関谷滋さんに聞く」(2022年3月5日開催)

---

発行日：2022年8月3日

発行：立教大学共生社会研究センター

171-8501 豊島区西池袋 3-34-1

電話：03-3985-4457

Fax：03-3985-4458

E-mail: [kyousei@rikkyo.ac.jp](mailto:kyousei@rikkyo.ac.jp)

URL: <https://www.rikkyo.ac.jp/research/institute/rcccs/>